

## パリで受けたいくつかの親切

定年後に始めた文学紀行の取材で、7月の初め『レ・ミゼラブル』の舞台フランスを訪れました。いつもは留守番役の妻も、今回は“花の都パリ“ということで同行、71歳と67歳のドン・キホーテと女サンチョ・パンサの“弥次喜多道中”的な旅となった次第です。

まずは街中で英語が意外に通じないのに驚き困惑しました。でもそうしたなか、たった4日間の滞在中にパリジャンから受けた親切には二度も胸を熱くしたのです。

パリ到着の初日のこと。夕方8時過ぎ、私たちは宿泊のホテルまで500メートルに満たないところで道に迷ってしまいました。パリの道路は碁盤形ではなく放射線状になっているものが多くて自分が居る場所の掌握が難しい。またどの建物も6、7階建ての同じ高さに統一されていて目安となる物を決めるのが難しいのです。

パリには外国人を狙ったスリが多いと聞いていました。暗くなると治安も心配になってきます。途方に暮れていると、たまたま私たちのいた道路に止めてあった自転車を取りに来た若いフランス人男性が声をかけてくれたのです。ホテルの番地を言うと、サッとポケットからスマートフォンを取り出した彼は、画面に周辺の地図を拡大し、5分ほどかけて念入りに調べてくれたのです。彼の詳しい説明と案内で私たちはなんとかホテルに戻ることができたのでした。

翌日。パリ郊外にあるユゴー文学記念館を訪れようと地下鉄を利用した際のことです。乗り換えの駅がわからなくなってしまいました。途方に暮れ、ホームの椅子に座り新聞を読んでいた50代と思われるビジネスマン風の壮年に尋ねてみました。

髭のそりこみが素敵なムッシュです。しばらく考えていた彼はパッと立ち上がり、フランス語で何か言うと手招きで自分についてくるように指示を始めたのです。彼の言葉はほとんど理解できなかったのですが、とにかくその「親切さ」についていきました。フランス語のわからない高齢の日本人にいくら説明しても難しいと思われたのでしょうか。彼は次の乗換駅まで一緒に電車に乗り、さらに着いた駅では郊外に出る路線の切符の購入まで試みてくれたのです。

しかもその時、切符販売機の調子が悪くフランス人の彼にしてもうまくいきません。やむを得ず20メートルほど離れた別の場所にある販売機に移りました。この販売機ではクレジットカードもOKだったのですが、今度はなぜか私のカード（VISA）を受け付けません。現金で料金は8ユーロ。でも紙幣は受け付けず硬貨のみ。私の財布には7ユーロ分の硬貨しかありません。自分たちの後ろには他の利用者が列を作って並んでいます。これ以上、時間をかけるわけにはいきません。すると彼はとっさに自分の財布から1ユーロをプラスしたのです。こうしてやっと切符を購入、その後も私たちが電車に乗るホームまで同行してくれました。

最初に声をかけてから30分余り。小さなビジネスバッグを抱えた彼は本来の自分の仕事



人の採用枠がグンと増えているともいいます。パリの超一等地への進出。店内の光景を見ているとむべなるかな。こんな現状を目の当たりにすると、グローバル化の波に乗り遅れる企業の前途は本当に厳しいだろうナと思われたものでした。

ところで、同店に入った主目的は、実は二人とも“用を足したい”ということでした。3年前に訪れたイタリアと同じく、パリの外出先ではどこに行ってもトイレが少ない感じですよ。手っ取り早い解決法はレストランにでも入ることでしょう。でも、自分のおなかの方はまだそんな状態に至っていなかった。そこで“日系企業でもあるし、もしかしたら”と淡い期待を抱きながら同店に入ったわけです。

と、次のやり取りが面白かった。

店内に入ると日本語のできそうな若い女性従業員に妻が尋ねました。

「店内におトイレありますか？」

「ええ、あります」と一度答えた彼女は、あわてて言葉を付け加え訂正したのです。

「いいえ、ありません」

この矛盾！ もうわかるでしょう？なぜ彼女がとっさに訂正したかの理由を！

以下は私が勝手に推測したところですが：

——店内、見た限りだけでも50人近くのスタッフが働いているのだからトイレがあるのは当たり前。でも顧客用のトイレはない。もしあることが知れ渡れば、毎日、何百、何千人とオペラ座見学で訪れている観光客が雪崩を打つようにして店内に流れ込まないとは限らない。となったら收拾がつかないだろう。入り口の従業員の彼女はまだ新人だった。ついうっかり「ハイ、あります」と返答してしまったが、とっさに店の決まり、上司からの指示を思い出し、あのような対応になったのに違いないと——（ユニクロさん、誤った解釈だったらゴメンナサイ）

ということで、“本来の用件”は結果的に後ほどレストランで解決したわけですが、なかなか気にいった品の買い物と共に、述べてきた二つの側面を観察できたのはもう一つの“小さな収穫”ともなったのでした。